

『ワンダフルワールド』

**

品川駅と大崎駅の間にある美術館に腹を抱えて笑い転げながら八時間掛けてたどり着いた。

どうして笑い転げていたかというところ、今朝食べたステーキ三百グラムを生そのまま食べていたことを思い出したからだ。

火を通さずにそのままかぶりついて気が付けば、ごちそうさまでした！ と両手を合わせていた。

本当に、今朝、ステーキ三百グラムを生で食べたのだろうか？

と思った僕の視線と、美術館の受付のお姉さんの視線が丁度合わさったものだから、

『これは何かのタイミングなのかもしれない』と感じた僕は、受付のお姉さんに思い切って訊ねた。

「僕って今朝ステーキ三百グラム食べましたよね？」

すると彼女は、「はい。生のまま召し上がっていましたよ」と律義に答えてくれた。

お姉さんの言葉に安心した僕は、ポケットから財布を取り出す。

「おいくらですか？」

「入館料とステーキ三百グラムで合計八千七百円です」と彼女は言った。

僕は千円札を手渡して、『お釣りは要りません』と答えた。

「ごゆっくりお楽しみくださいませ」

頭を下げた彼女は、僕が手渡した千円札をその場で僕の目を見ながらビリビリと破り捨ててくれた。

心が、高ぶった。さすが、美術館。

アートの世界は一味違う……のか？

天井を見上げながら破られた千円札の余韻に浸っていると、『ほら行くよ』とハタケヤ

マ星人に伝えられた。

誰も座っていないピアノが鳴り響いている。

誰も弾いていないのに鍵盤が動いている……。

ドビュッシーの『月の光』が流れていた。

誰も弾いていないピアノの鍵盤が動いている異様な光景を目の当たりにした僕の視覚が
脳みそに、『やべえぞ。どうにかなっちまいそうだ』と伝達した。受け取った脳みそが、
ウ・ル・ウ・ルのボタンを押し込んだ。

僕の目頭が、熱くなっていく。

日頃のフラストレーションがすべて浄化されていくようだった。

心が、空っぽになっていく。

ああ、僕は疲れていたのか。

鼻から深く息を吸い、安堵と共に大きく吐き出だした。

不意に、とある先輩との思い出が脳裏を横切った。

むかし、道を歩いていると先輩が、『最近、映画みてるか』と訊ねてきたことがあつた。

当時の僕は、『家で結構みてますよ』と自信満々に答えた。

すると先輩は、『それは映画じゃない』と言った。

三秒くらい経って僕の目が丸くなっているのを見てから『自宅のDVDプレイヤーでみる映画は自宅のDVDプレイヤーでみる映画なんだよ。それは、映画じゃない。この違いが分かるか?』

当時、世の中の仕組みを何も理解していなかった生意気な僕は、『どちらも同じ映画じゃないですか』と見栄を張りながら吐き捨てた。

『映画館で見る映画以外は映画ではありません。覚えときな』

と先輩が言った。

『ここ、テストに出るぞ!』

先輩の唐突な叫びに思わず、『テスト?』と呟いてしまった僕の周りを歩いていた人間たちが全員、『分かりました!』と言った。総勢、二百人くらいは居ただろうか?

二百人は皆、ハンバーガーを持っていた。

一通り辺りを見回した先輩は、『よろしい』と言ってジャケットの内ポケットからハンバーガーを取り出して一口ですべてを食べ尽くした。

僕はそれ以来、ハンバーガーを食べていない。

どうして今、この記憶が蘇ったのだろうか？　と思っている間に、演奏は終わっていた。しばらく経って又、冒頭から『月の光』が流れ始めた。

腰かけていた大理石から立ち上がり、作品名を確かめるために足を進ませた。

作品名が記載されている白いプレートには、『自動演奏ピアノ』という文字が書かれている。

「あの人、知り合い？」

後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた。

振り返ると、ハタケヤマ星人が立っていた。

「あそこに座っている人」

僕は、ハタケヤマ星人の指先が示す場所を確かめた。

案の定、椅子の上には誰も座っていなかった。

「誰も居ないよ？」

と僕は言った。

「誰も弾いていないのに鍵盤が勝手に動くわけない」

と彼は言った。

「そういう作品なんだよ？」

と僕は教えてあげた。

「そうか。でも、あの人、好きだな」

ハタケヤマ星人は、くると半転してこちらに背中を向けてから近くにあった階段へ足を運んだ。

階段を上り二階へ向かうハタケヤマ星人に、『君には一体、何が見えているんだい？』と訊ねてみると、彼は僕に視線を送ってから、『きみには見えていないもの』とさりげなく言った。

呆然としている僕に、彼は続けた。

「でも、きみに見えているものをボクは見るができない。世界ってそういう仕組み」

ハタケヤマ星人を下から見つめている僕の視覚は、彼の右足が二階のフロアにたどり着いたことを察知する。彼の足音は、生まれたての赤ん坊のような匂いがした。

僕は慌ててハタケヤマ星人を追いかけていた。

衝動が、彼の存在を求めているのだろう。

階段を一段ずつ飛ばして彼の元へ駆け寄ろうとしている。

飛ばされた階段たちから文句が垂れているのを察しながらも僕は、彼らに謝ることなく白を切った。

二階のフロアにたどり着いてハタケヤマ星人の後ろ姿が視界に飛び込んできたとき、僕は胸いっぱい叫んでいた。

「ねえ、世界って何者なの？」

瞬間、美術館の明かりがすべて消えた。

視覚が潰されて、身動きが取れなかった。

誰かが、電気の供給を遮断したのだろうか？

暗闇に動じる人間は居なかった。

誰の悲鳴も聞こえない。

誰の足音も聞こえない。

誰の何も聞こえない。

漂う静寂が、美術館の空気を惑わせる。

唐突に、シロナガスクジラの鳴き声が聞こえてきた。世界に解き放たれたシロナガスクジラが一頭、暗闇の海を泳いでいる。バンドウイルカが、続いた。ホオジロザメがその後

に続く……。

優雅に泳ぐ三つの感覚を受け取った僕の上空に、白鳥の群れが現れた。地上にはアナコンダ。アフリカゾウが鼻の下を伸ばして密接した状況を窺っている。マサイキリンが、今か今かと首を長くして次の展開を待ち望んでいる。

僕は目を瞑り、

暗闇と同化する彼らの想いをすべて受け入れることにした。

「レディースエーンジェントルメン！」

僕の願いが通じたようだ。

チャンチャーンチャントウチャチャチャーン。

と一階からピアノの音が聞こえる。

……ドビュッシーの月の光。

トウチャチャチャチャーンチャトウチャチャチャーン。

と一階からピアノの音が聞こえた。

『自動演奏ピアノ』と言う文字が頭のなかに浮かび上がった。

けれども、今、暗闇に立ち尽くす僕の感覚は誰かが座っているように思えて仕方がなかった。

『誰も弾いていないのに鍵盤が勝手に動くわけない』とハタケヤマ星人は言った。

不意に、先輩との思い出がまた、脳裏を横切った。

『外国人になりたかったんですよ』

と若かりし僕は先輩に言った。

『なんで？』

と先輩が返してくれた。

『なんか格好いいじゃないですか』

と言う僕の心情は、『自分は他の人間とは一味違うんですよ』というところを見せつけたいと思い込んでいるみたく、いけしゃあしゃあと言葉を吐きだしていた。

僕の表情を捉えた先輩は、『お前はもう立派な外国人だよ』と伝えてくれた。
え？ と漏らした僕に向かって、

『日本ではない国の人間からすれば、お前はもう外国人そのものだよ』と言った先輩の目には一体何が映っていたのだろうか？

ピアノの演奏が、止んでいた。

しばらく経っても再び冒頭から月の光が流れ始めることはなかった。
誰も座っていないはずの椅子が動く音がする。

すくっと立ち上がり、こちらの様子を窺っているように感じた。

見られているという意識が脳裏を襲い、見られても恥ずかしくない佇まいにシフトチェンジしていることを知った。

「もうすぐ暗くなるから帰るね」

聞き慣れた声が誰も座っていないピアノの辺りから放たれた。

少し経って扉が開く音が聞こえてから、扉が閉まる音が聞こえた。

「ちょっと待ってよ！」

おぼつかない足取りの中、手すりを頼りに階段を下りていく。

先ほど一段ずつ飛ばしてしまった階段たちに、『ごめんね』と謝りながら、慎重に、一歩ずつ、階段を、下りていく。